

# 文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間 会報 No.73 2016年1月31日発行  
川崎市幸区古市場 2-109 京浜協同劇団内 TEL 044-511-4951 郵便振替 00250-3-18369

新しい年を迎えて

## もっともっと多くの方々が会員となる年に

二村 終子

新しい年が巡ってきました。

4冊目の5年日記が始まりました。15年前、絶対途中で放り出してしまうと思っていたのに（小学校の夏休み、絵日記なんてまとめて1週間分なんてざらでした）、まあ、私も年をとったのかもしれませんが。3冊目の最後のページには、黒く大きな「×」をつけたような想いの2015年でしたが、明けて16年、歴史は繰り返しながら少しずつ先へ行くのだと、正月気分もあってかのんびりかまえてしまいました。そして、でもこの4冊目が終わる頃、5年後私は生きていたのだろうかなどと思ってしまいましたが、私はとにかく「日本国憲法」は今のまま、変えられることなく存命であってほしいと——あの10月4日「安達元彦の音楽会」での合言葉「黙ってはいけな」と思い今この時物申すを忘れてはしないと肝に銘じることとしました。

さて、今年の仕事始めは、1月4日、去年の「安達元彦の音楽会」の総括慰労会および安達元彦さんの誕生会となりました。出演した人、舞台を支えた人、観に来られた人、それぞれの立場からの発言が出そろい、



「安達元彦の音楽会」の総括慰労会を行いました

やっとな音楽会の締めくくりができた感じがしました。（音楽会に出演された田中雄二さん、星ひかりさんが、文化の仲間の会員となりました。）

劇団の方々、文化の仲間の会員ほぼ同数の出席となり、西海亭のご馳走の後、バースデーケーキが見事20片に切り分けられ、安達さんの76歳をお祝いしました。

去年は1月の「お楽しみ会」から始まり、第1回「旬をたのしむ夕べ」（5月）、劇団員との「交流旅行」（6月）、「安達元彦の音楽会」（10月）と、私たち文化の仲間にとっては忙しかった1年でした。企画はしたもの、どう具体的に取組んだらよいかかわからず、時間だけがたっていく。右往左往、おまけに人手は足りない。今年は世話人会を中心に話し合いを重ね、何とかしたいものと思っています。

2016年1月10日「お楽しみ会」は、おかげさまで超満員でした。つぎは、第2回「旬をたのしむ夕べ」を劇団の屋上で開催の予定です。これからの様々な企画が、劇団の皆さんと共に歩む取組みになるように、また「文化の仲間」の会員が気軽に、積極的に参加できる取組みになるように、ガンバってみるつもりです。

さて、数十名からなるこの会ですが、今年は何としても、もっともっと多くの方々が会員となってくださることを期待しております。ぜひ声をかけてみてください。

2016年、今年もよろしくお願ひいたします。

（文化の仲間・代表世話人）

第9回「お楽しみ会」を開催しました

# 来場者は100名を超え会場いっぱいになりました

橋本 教善

京浜協同劇団を地域の人たちにもっと知ってもらおうということで始まった「お楽しみ会」が1月10日に開催されました。

今年もゴローちゃん・城谷さんの迷コンビによる司会で開会。演目の始めは、「ポカポカ Enjoy 体操」で



す。劇団稽古場でダンス教室を開いている川内さんと来場者が一緒に体操して、会場は一気に打ち解けました。続いて、小学生のみゆうさん・けんちゃんの腹話術。



昨年に続き2回目の出演です。2人(?)の絶妙なやりとりは会場の子どもの笑いを誘っていました。

小中学生がメンバーのIEG一輪車クラブによる華麗な一輪車ショーは、一輪車を巧みに乗りこなし、狭い会場を華やかな雰囲気してくれました。休憩のあと、川崎太鼓仲間響ひびきによる獅子舞では、太鼓・笛・鉦の軽快なお囃子に合わせ踊る獅子舞とお獅子による余興で、会場を日本らしいお正月にしてくれました。伊



藤さん・メエちゃんの腹話術は手品を交えながらのひと味違った大人の腹話術を楽しみました。

最後は恒例の「輪投げ」に、来場者・出演者が白熱



の競演を繰り広げ、今年のお楽しみ会が終わりました。帰る子どもたちに「来年も来てねー」と声を掛けると「また来るよー」とのうれしい返事がありました。

来場者は、お年寄り・未就学児・小学生・中学生など100名を超え、会場いっぱいになりました。

来年は10回記念会として、劇団員・文化の仲間・地域の方々の参加による「お楽しみ会」として大いに成功させましょう。(文化の仲間・世話人)



# “日本の恐怖と貧困”に迫る

初めての試みである京浜協同劇団の集団創作「ブラック カフェー日本の恐怖と貧困」が、11月27日～12月13日の間、10ステージ開催されました。出演者・観客の皆さんに感想を寄せていただきました。

「ブラックカフェ」奮戦の記

## 今こそ創作劇なのではないかと

藤井 康雄

創立55周年第3弾の企画をどうするのか、当初の段階では黒澤参吉、大橋喜一、神谷量平氏らの作品の中からという案も出された。しかし、第二次安倍政権誕生以降の、私たちの暮らしや平和、民主主義を完全に否定する強権的な政治のやり方を目の当たりにしたとき、今こそ創作劇なのではないかと決意するに至った。決意したものの私たちだけでは力量不足なので、わが劇団も加盟している全日本リアリズム演劇会議へ「今こそ、創作劇運動を起こそう！」と提起し、作品の募集をしたのである。その結果5人の方から9作品が寄せられた。ありがたいことであったが政治情勢の推移はますます厳しさを増し、ついに「戦争法案」が浮上、国会に上程されるに至った。今日に鋭く切り込むのが創作劇の使命だとしたら、リアルタイムで何とかしたい、そうだとしたらいかに力量不足だとしても我々で何とかするしかない！ 無謀とも思える京浜流の挑戦が始まった。

そのやり方は、とにかく劇団員全員が創作と向き合うこと。言い換えれば、今日と向き合い演劇という表現へどう実を結ばせていくのか。その作業は一人では困難すぎるので劇団員を3グループに分けての集団的な討議から始まった。

上演日まで残された期間は僅か9か月、しかも市民劇「華やかな散歩」の取り組みと並行しての待ったなしの開始であった。残された期間から考えても「日本の恐怖と貧困・2015」という括りでのオムニバス形式を選択した。

一人一人が思いついた題材やアイデアを出し合い、それらについての意見や感想を出し合いながら、書ける人はプロットや作品にまで仕上げ提出し合う。さらにそれらに注文や意見を出し合う作業が暫く続いた。数回にわたって書き直した劇団員が何人もいるが、今回の上演に採用されなかった作品も多いのである。しかし集団的な取り組みの結果だと思いが「日進町ゴジバ」や「耳を澄ませば」の作品の発想は、実際に書いた作者以外の劇団員から出されているのである。

最終的に作品に仕上げる書き手グループを5人で構成、何とか目鼻がついたのは劇団での唯一の書き手和田庸子の奮闘もあったが、すでに9月の半ば、協力出演者も確保しなければならないのだが、3週に亘る公

(写真©長坂クニヒロ、以下同)



演で二の足を踏まれ難航したが何とか間に合った。そしてこの若者たちには大いに助けられた。

さあ、稽古開始だ。やるしかない。後には引けない。幸いなことにオムニバス、さらに幸いなことに大、小の稽古場と事務室の3か所での同時多発稽古が可能となり「シニア劇団」の長所を生かした昼間の稽古も組みこんだ。劇団員が上演作品の実態に触れたのは、なんと初めての通し稽古の日であった。

そのほかにも初めての試み、土足での入場対策も試行錯誤の連続。普及も遅れに遅れ、これでは新稽古場建設以来、初めての赤字公演かと思われたが、尻上がりに客数が増え、何とかセーフ。これも「文化の仲間」の皆さんやこれまで劇団を支えてくれた多くの観客の皆さんのおかげです。この場を借りましてお礼申し上げます。

ドタバタの連続でしたがその教訓。「素顔をさらせ」「人の権で相撲をとるな」

## “スペース京浜”を実感

鬼丸 ゆり

私にとって「スペース京浜」は悩みの種である。

階段昇降や会場である客席脇まで、毎回通い続けることが出来るのか？





……心配なのだ。でもそんな気持ちとは裏腹に、私は友だちに手紙や電話でこう呼びかけます。「出演はしないけど、いつでも居るから、10 ステージ全部居るから、ご都合の良い日がありましたら是非観に来てください。お待ちしております！」お客さんと約束してしまうのです。

今回、お客さんは土足で入場。「靴のままで良いの？ …よかった！」と喜んでいました。側面席を勧められた観客は「こんな近くで観られたら、やりにくいんじゃないの？」と言う。私は「役者は観てもらうのが好きなのよ！ いっぱい観てもらいたい。沢山の観客さんに観てほしい。いっぱい観てもらおうとやりやすい（演じやすい）のよ！」

咄嗟にしゃべった自分の言葉に……そうだ！ 舞台は創り手だけではダメ。お客さんが居て初めて成り立つんだ！と再確認。お客様は神様です。

そして、悩みの種であった“スペース京浜”がとても愛おしくなり、「この日、この地で、この人々と」を実感することが出来ました。よかった！ ありがとうございました。

## 十分に恐怖と貧困が表せていたと思う

藤井 あつし

きょうは千秋楽ですね。たぶんご苦労さんの打ち上げで盛り上がっていることでしょう。そんなときですが、私は前日の12日に観させていただきました。その感想を述べさせていただきます。

舞台進行に「モグラ」が出てきたのにはびっくりした。はじめは、バックに海を思わせるような音楽が流れていたの、「モグラ」とは思わずに、オットセイかなと思わせた。

「日進町ゴジバ」は、貧困の象徴であろう簡易宿泊所の町火事を扱った場面は、原発ジプシーを扱い社会性が存在し、浅田次郎張りの創造と演出には感嘆した。

「生活相談室」には、そんなこともあろうと思わせるブラック企業の存在に驚嘆し、怒りを感じさせ、正に、貧困と恐怖を感じさせるものであった。

「最後の授業」については、良く出来ていたが、こ

んなものが現実化するのだろうか疑問も湧いた。勿論、自民党の改憲草案で行けばそうなるのであるが、そう容易く改憲されるのだろうか？ またされたとして、その通りに強行されるのだろうか？ そうさせるものかとか、そうなった時の怒りが湧いて来ることなく、妙に納得している観客がここに居ることに、唾然とし、先生が、家に帰って苦悩するのではなく、授業中にその苦悩を表現できなかったのか、この劇の演出に疑問が湧いたものだ。

「レンタル ショップ」については、たぶん「戦争法」がそのまま施行されれば、そんなことになるだろうと想像させることに十分納得するが、チャット超空想的で、現実感がないとも思わせた。「特定秘密保護法」も扱われ、十分に社会性はあるのであるが、場面をホルムズ海にあてたことに問題があったのではないだろうか。現在紛争も戦争もない場面を思考して充てることが求められたのではないだろうかと思う。例えば、ブラジルとか、ハワイとかではだめでしょうかと思う。

全体を通して、十分に現在の日本が抱える恐怖と貧困が表せていたと思う。 (2015年12月13日)



## 今、頭の中にあるもの

川向 あゆみ

京浜協同劇団の「ブラック・カフェ」が終わり、打ち上げの酔いが回ってきたところで、この原稿を依頼されました。そこからは、何を書こう、何を書こうと悩まされる毎日…。そんな最中、頭にあることを文字に起こしていたら、結構ポンポンと出てくるものですね。依頼主からは、ゆるく書いてと言われたので、そうさせていただきます。

私は小学生の時から、たくさんの係や長を務めてきました。応援団長、合唱コンクールの指揮者、班長、副部長、部長、副学級委員長、選挙管理委員書記、等々。先生は、決め事でなかなか決まらなくなると、生徒たちを説得し始めます。将来のためになると。だから、本当はやりたくなかったけれども、責任感が強く、リーダーシップがある私は、しぶしぶ手を挙げて引き受けていました。しかし、高校二年生の時に演劇部の部長

になって、気づいたことがありました。それは、全然まとめられないことです。それまでにたくさんの人をまとめてきたのに、そのスキルがこの部活で発揮できないと痛感したのです。そのことに私はひどくショックを受け、軽いうつ状態になりました。

とりあえず前説はこのくらいにします。こんな経験をしてきた私が、今後どういう風に生きていきたいか紹介しましょう。まずは、「自分らしくいたい」ということです。最近まで、自分が周りとう違うことが嫌で、普通を目指していました。しかし、自分と違う人を演じながら生活していくのは、とてもつらいことがわかりました。でも、協調性を持たなければいけないくらい、周りの人とは少し違っているのは分かっています。演劇部の子からも、変わっているねと言われていましたから。例えば、考え方があったり、植物と会話していたり、お年寄りみたいに空を眺めてまったりしたりということです。若者らしくないのです。でもこれからは、それでいいのだと、自分で認めてあげます。次は、「頑張らない、考えない」です。学生の頃は、すごく考えていました。あの子はどう思うだろう。あの子は機嫌悪そうだな。今私が動いたら、周りはどんな反応をするだろうか…。きりがありませんよね、こんなこと考えていたって。他人に迷惑をかけてしまうときはかけるんだって。そういう方向で行きたいと思いません。最後に（本当はもっとありますけど）、一番やりたいこと。それは、「こどもになりたい」ということです。私、前述にあったように、いろいろな長になったり、周りのことを常に考えていたり、年齢はこどもでも、中身がこどもじゃなかったんです。だから大人になった今、手遅れかもしれないけれど、こどもになろうとしています。

今、演劇アカデミーに通っているのですが、そこでは無邪気になることを絶対条件としています。心の中にある鬱の塊と闘いながら、頑張らず、考えず、こどもになっていきたいと思えます。目指せ、こども！

(協力出演者)

## 私が勤めている会社も

枯木 啓佑

ブラックカフェの「生活相談室」の所長、「最後の授業」の宮田を演じた枯木啓佑です。今回私は、悪い人の役と何も知らない無垢な生徒の役をやらせていただいたわけですが、芝居のタイトルにある通り「ブラック」という言葉がふさわしい芝居内容でした。所長の悪知恵の働く立ち回りや、「最後の授業」の生徒たちに教えたことを教えることができなかった先生の無念な思いなどや、私が出ていない「日進町ゴジバ」や、「レンタルショップ」など、それぞれ違う形で「ブラック」という意味を表現していました。「ブラック」といえば、私が勤めている会社もなかなかのブラック企業です。自動販売機の補充、ベンダーをやっている



のですが、週休二日のシフト制で昇給は毎年一回有り、ボーナスも年二回あって企業年金などもある大手企業です。ここまで見れば悪くはないかと思うかもしれませんが、作業内容などに難有りです。新商品が出るたびに示されたパーセンテージ分商品を展開し、時期によって商品を入れ替えたり、メーカーの希望で展開しなくてはいけないものを入れたり、当たり前でもあるこの作業がとても大変です。常にいろんな数字に追われているので、昼休憩など全く取れず、昼食など食べずに一日が終わるのがほとんどです。勤務時間は長い時だと、朝7時に出勤し、終わるのが夜22時前後ですが、いつも偉そうにしている主任以上の人たち、営業、事務の人たちは朝9時に来て、夜18時～20時には完全に帰るといふ暴挙っぷりです。

おまけに主任以上の人たちの飲み会があるからという理由で19時には出勤している人たちを完全撤退させるという舐めたことをしてきます。当然彼らは手伝ってなどくれません。毎日忙しく、体を痛めつけながら仕事をしているのに上司たちはそのようなことをします。不幸中の幸いなのが、会社の作業内容や、上司のことが嫌いすぎて従業員同士の仲が良いということです。話す内容はたいてい決まっています、いつこの会社を辞めるのか、次はどんな仕事をするのかなどです。早い人で2月には辞めるという人もいて、私も次の冬にはこの仕事を辞めようと考えています。ただ、この仕事が辛いからという理由だけではなく、そもそも消費税が上がって自販機の需要が下がったのに売上なんか上がるはずもなく右肩下がりで。ジュース1本に130円も払いたいなんて思わないでしょう。なので次は数字、時間に追われない会社に就職したいですね……。

今回の芝居で自分が体験しているこのようなことが伝えられなかったのは少し残念ですが、今の日本が置かれている状況を少しでも理解していただけたならば今回の芝居は成功と言えるでしょう。「これから」を作っていくのは私たち全員です。この国にいる限り無関係ではありません。それをまた、芝居を通じて多くの人たちに伝えていきたいですね。(協力出演者)



# 「戦後 70 年を機に、自分史を振り返る」・その 3

——戦争、また戦争の昭和前期——

小田 健也

〈個人史〉と〈時代〉とは、不即不離の関係にありながら、これを大きな流れとして俯瞰することは、難しいものようである。

私の青少年期は、第一次世界大戦から満州事変、日中戦争と、昭和という時代は、ずっと「戦争の歴史」だったと云える。

そうした「時代」を、「歴史的に捉える」ことは大変なことだと、前号でも述べてきたが、その「昭和」も終わり、「平成」になってもう 27 年経ってしまったから、「昭和は遠くなりけり」と云ってもおかしくない時が経ってしまった。「昭和は親父の時代だろう」という世代が多くなってきたのだから、「昭和という時代は、どういう時代だったのか」ということを、もう一度〈見てみる〉ことが必要になってきたのではないかと感じている。

……というわけで「私の昭和」を辿ってみることにした。

## ○私の青少年期は、「戦争」の昭和史だった。

♪守るも攻むるもくろがねの 浮かべる城ぞたのみなる……。よく歌ったものだ、小学生の頃である。——私は日本の植民地であった台湾台北市で生まれた。そして昭和 12 年、台北の樺山かばやま小学校に入学した。丁度その年、北京近郊の盧溝橋ろこうきょうで発砲事件が起こり、日華事変（日中戦争）が始まった。そして私は小学校二年生の時に台湾から福岡県の古賀という町に引き揚げてきた。医者であった親父の転勤に因るものである

## ○「昭和 16 年 12 月 8 日、——本八日未明、わが帝国陸海軍は……」

記憶に残るラジオ放送を聞いたのは、小学校の五年生になった時、口調は覚えているが、内容は、よく理解できなかった。太平洋戦争の勃発である。そしてその 2 年後、私は郊外電車で 1 時間もかかる、福岡市の「県立福岡中学校」に入学した。

その頃は何もかもが戦時色ばかり、先ずやらされたのが、分列行進の中隊長の役である。サーベルを下げ、「カシラー、ミギー」と、サーベルを振り上げて号令する役だが、今でも覚えているのは、当時チビだった私は、腰に吊るしたサーベルの鞘が長過ぎて、鞘の先をズルズル地べたに引きずって歩くのが格好悪くて、これを誤魔化して歩くのに苦労したのを覚えている。

★詩人・茨木のり子さんの「はたちが敗戦」という

エッセイの中で、「女学校時代、分列行進の時に中隊長をやらされ、大声で号令をかけさせられたおかげで、音楽の先生から“すっかり声を駄目にしましたね”と言われた。」と書いておられたが、それを読みながら、私もサーベルを引きずって歩かなくてもいい背丈になりたいと願ったのを思い出していた。

## ○「福岡空港」は僕たちが造った？

福岡中学に入学したものの殆ど勉強の時間はなく、教練と飛行場作りの土木作業ばかりである。今の「福岡空港」であるが、学校が飛行場建設地に近かったため、登校するとすぐに、ラッパを先頭に鉄砲の代わりにスコップを肩に担ぎ、飛行場地向けて行進である。そして一日中、土を掘り返す作業が続いた。

## ——イギリス兵とのちょっとした交流——

そんな我々と一緒に働くのが、捕虜のイギリス兵。フライパンのような鉄兜をかぶり、ブルドーザーを運転していた。そのイギリス兵が、僕たち中学生がスコップで土を掘り返していると、ニヤッと笑いかけてくるのである。「おゝ、おゝ、お前たちも働かされているのか」といった感じである。いや、それともイギリスに残してきた家族を、弟か子どもを思い出していたのかもしれない。いずれにせよ、お互いに掘り返された泥んこの中での、ほんの一瞬の親近感みたいなものである。そこには当時さかんに叫ばれていた「鬼畜米英」といった感覚はなく、今思えば、ロンドンのピカデリー・サーカスで出会っても、これほどの親近感は起きなかったかもしれないと思えるのである。戦争がなければ、イギリスのオジサンと日本の少年の、何でもない出逢いだったのに……。

## ○飛行場の作業が終わると、今度は工場へ登校？

三年生になると工場動員が始まった。学校に登校しないで、工場に登工（とうこう？）する毎日なのである。この工場動員には、あまりいい記憶は無い。私と一緒に配置されていた旋盤の工場で、友だちが小休止の感覚で私の旋盤機械の前に立ち「うまくいっとるか？」と声をかけてきた。その瞬間、旋盤が止まった。あっ



福田恒存作「幽霊やしき」  
父親役の清水将夫と筆者  
(写真：小田さん提供)

と思ったら、「痛ァい！」とその友だちが叫んだ。歯車の間に友だちの人差し指と中指が挟まれていた。電源のスイッチを切り、みんなで歯車を逆に動かし友だちの指を外したが、指はギザギザにちぎれ、ぶら下がっていた。ボロ布で指を包み、リヤカーに乗せて診療所に運んだが、彼の指は2本とも無いままになってしまった。“彼はいつまでも〈戦争〉を手に刻んだまま生きていくのだな……。”

○アメリカ戦闘機の飛行士の顔が見えた！

工場が飛行場に近かったため、しばしば博多湾近く

にやってきたアメリカの空母から、グラマン艦上戦闘機が飛行場の攻撃にやってきた。その度に飛行場の傍らにある工場に、機銃掃射を加えていくのである。

〈ブー〉とサイレンが鳴ると、僕たちは工場の外の畠に飛び出し、畝と畝の間に寝そべるのであるが、それでも怖いもの見たさで、そっと顔を上げると、ゴーグルをかけた操縦士が見えるのだ。「あッ、眼が合った」、そんなことはないのだが、やはり中学三年生、慌てて土に顔をくっ付けた。……そしてとうとう、或る日の空襲で、友だちが右腕の上腕を撃ち抜かれた。

## 第37回 かわさき演劇まつり

# 『ブンナよ木からおりてこい』に決定

京浜協同劇団 城谷 護

今年7月に多摩市民館で行われる第37回かわさき演劇まつりの上演作品は、『ブンナよ、木からおりてこい』に決まりました。演出は劇団企て（くわだて）の小山裕嗣（ひろつぐ）。川崎演劇協会に加盟する京浜協同劇団、劇団企て、劇団ラニョミリ、プロジェクトMの4集団が合同で取り組みます。

この作品は、水上勉の小説を小松幹生が劇団青年座の依頼で1977年に脚色したもので、青年座はもとより、多くの劇団によって上演され続けている名作です。かわさき演劇まつりでも藤井康雄演出により2005年に同じ多摩市民館で上演、好評を博した作品です。

ブンナというカエルは、母が鳶（とび）にさらわれたのか行方不明、父は蛇の餌食になり、一人ぼっちになったトノサマガエルです。ブンナは地べたを這い回るだけでなく、木に登ったり、空を飛んで見たいという夢を持っていました。ある日、ついに椎の木に登ることができたのです。しかし、木のとっぺんは、鳶が

捕まえた獲物を仮置きする中継所になっていたのです。木のとっぺんに登ったブンナの所には鳶に傷つけられたすずめや百舌（もず）、ねずみ、蛇たちが次々と運ばれてきます。動物たちは鳶に食べられてしまうという死の恐怖に怯えているのです。そこには生への欲望が渦巻き、また、自分だけは生きたいというエゴや恨みつらみがぶつかり合います。

この作品は、動物たちを夢や冒険や苦悩を描きながらも、実は生きることを私たち人間に考えさせてくれるのです。とにかく感動的な、見応えのある作品です。

かわさき演劇まつりは、市民に良い演劇を観てもらうこと、市民劇団の活動の場を広げることを目的に1972年に始まりました。それは伊藤革新市長が誕生した翌年でした。今回で37回になります。

4集団の合同公演にご期待ください。

## 第37回 かわさき演劇まつり

# ブンナよ木からおりてこい

原作 水上勉 脚色 小松幹生 演出 小山裕嗣

日程 2016年7月23日(土) 昼・夜 24日(日) 昼

会場 多摩市民館ホール 料金 有料ですが現在金額は未定です

[お問合せ] 川崎演劇協会 川崎市幸区古市場 2-109 TEL. 044-511-4951

◎文化の仲間通信◎

◆わらび座公演 舞楽詩 風の又三郎

日程 2月18日(木) 18:30 開演

会場 宮前市民館ホール

入場料 全席指定 3000円

主催 わらび座「風の又三郎」実行委員会

主人公一郎は、言葉にならない思いを抱えていた。未だ知らぬ自然の脅威、自分はどうか生きるのか？ 大風が吹き荒れた朝、高田三郎という転校生が現れる。  
問合せ わらび座関東・東海事務所 048-286-8730  
オンラインチケット <http://www.e-get.jp/warabi/pt>

◆川崎市民劇場例会

劇団民藝公演 真夜中の太陽

日程・会場

さいわい市民劇場 2月13日(土) 15:30 幸市民館

市民劇場なかはら 22日(月) 18:30

23日(火) 13:30 エポック中原

たま・あさお市民劇場 10日(水) 18:30 多摩市民館

原案・音楽 谷山浩子/作 工藤千夏/演出 武田弘一郎/出演 日色ともゑ・石巻美香 ほか

戦中であって健気に生きる女学生たちの明るさや希望、純粹さや輝きが共感を呼ぶ、後味さわやかな作品。  
申込み・問合せ さいわい市民劇場 044-244-7481  
市民劇場なかはら 044-455-7950  
たま・あさお市民劇場 044-911-6920

◆腹話術のつどい 10周年記念公演

日程 3月6日(日) 13:30～16:30

会場 川崎市総合自治会館

入場料 一般999 障がい者・18歳以下無料円

主催 腹話術の会★きずな

問合せ しろたにまもる 044-544-3737

◆日本アンデパンダン展

いま「時代の表現者」として、平和・自由の創造を

日程 3月16日(水)～28日(月)(22日休館)

開館時間 10:00～18:00(初日は正午から、最終日は14:00終了)

会場 国立新美術館1階展示室1A・B・C・D

入場料 一般700円、65歳以上・高校生400円

中学生以下・障害者と付き添い1人無料

出品作品 絵画等平面、彫刻等立体、工芸、CG、墨象、インスタレーション、パフォーマンス、映像等

日本アンデパンダン展は、作家、批評家、鑑賞者が対等な立場で参加し鑑賞しあうことによって、ともに新しい美術を創造し合うところです。

資料請求 日本美術会 03-5842-5665

◆平和トークと文化のつどい

戦争法強行採決から半年。あの日を忘れない。

日程 3月19日(土) 午後2:00～4:30

会場 エポックなかはら7F大会議室

料金 一般999円 障がい者・学生500円

参加予定 SEALDs、ママの会、原発、辺野古の代表、ハンドベル、朗読、合唱、腹話術、大喜利など。

問合せ かわさき九条の会 044-955-5104 安藤

◆サム・トゥッ・ソリ JAPAN TOUR 2016

日程 4月5日(火)

開演 昼 15:00 夜 19:00(開場30分前)

会場 神奈川公会堂

入場料 一般3,000円 高校生以下・障がい者1,000円(全席自由)

演奏曲 私たちの歌がこの暗い大地にひとすじの光となれるなら/荒野にて/同志のために/朝露 ほか  
韓国の実力はアーティスト・スペシャルユニット、平和と人権を歌いあげる「サム・トゥッ・ソリ」が再びやってくる。

問合せ 神奈川音楽センター 045-212-1078

◆しろたにまもる 3,500回記念ライブ

日程 4月29日(金・祝) 午後12:00～16:00

会場 浅草・東洋館

木戸銭 2,500円、こども1,000円

東京演芸協会が腹話術上演3,500回を祝ってライブを開いてくれます。浅草の色物芸人10人も友情出演。

問合せ しろたにまもる 044-544-3737

■文化の仲間ギャラリー■

小野寺 晃<sup>®</sup>



前号でトリミングを間違えて掲載してしまいました。再度掲載します。